

大崎市教育委員会(古川東中学校の取組から)



全員の心を一つにして歌った校歌(運動会にて)

I 東日本大震災

1 3・11 東日本大震災の発生

3月11日の午前、大崎市内の中学校9校(11校中)では卒業式が行われ、同日午後2時46分未曾有の大震災に見舞われた。

震災直後の停電により、電話や携帯電話等の通信手段が途絶えた。大崎市役所岩出山庁舎にある教育委員会には、近隣の学校から続々と教職員が被害状況の報告に訪れたが、市内全校の状況を把握するには時間を要することとなった。次第に被害状況が明らかになるにつれ、校舎、体育館、校庭、プールなど学校施設の被害が甚大なこと、道路や橋、ライフラインなどの影響も深刻であることなどから、学校再開は容易でないことが分かってきた。旧古川市内の学校では避難に集まってくる住民への対応に追われている状況なども伝えられた。大崎市と教育委員会では直ちに災害対策本部を立ち上げ、対応に当たった。教育委員会では職員が分担して各学校の被害状況等の情報収集に努め、児童生徒・教職員の安否確認を急いだ。大きな余震も頻発することから校舎等の被害状況の確認と安全が確保されるまで、当分の間全幼・小・中学校を休校とする措置をとった。

2 東日本大震災発生直後の状況

3月11日、午後2時46分。古川東中学校では、卒業証書授与式を終え、多くの教職員は下校した生徒の様子を見届けるため校外巡視に出ているところに大地震が発生した。大規模耐震工事が待たれていた校舎の普通教室棟と特別教室棟(昭和54年4月1日開校の鉄筋コンクリート3階建)では、地盤の液状化により校舎が沈下し、南側に最大25分の1傾斜、廊下床の点検口が吹き飛び砂埃や泥水が吹き出した。校舎は度重なる余震により倒壊の危険があった。また、体

育館も沈下が見られ、危険な状況となった。かろうじて校庭に避難した教職員を招集して、学校長は校舎の被災状況を説明した後、以下の指示をした。

- ① 明朝から生徒の安否確認を行う。
- ② 校庭にテントを設営し、本部を置く。
- ③ 校地内立入禁止の処置を取る。

電気や水道などのライフラインがストップし、頼みの通信手段の携帯電話も充電できずに連絡手段を失った。これ以降、直接口頭での指示連絡を取らざるを得ない状況となった。また、地震直後から震度4程度の大きな余震が続き、しかも吹雪の中、不安と厳しい寒さの中での作業であった。

大震災発生から3月末までの大崎市教育委員会と古川東中学校での対応のたまかな概要は、以下のとおりである。

・ **3月11日(金)** (◇：古川東中学校での対応)

震災直後、大崎市役所岩出山庁舎の大崎市教育委員会内に災害対策本部を設置、大崎市役所に市災害対策本部(大崎市役所北会議室)を設置。

- ◇ 校舎倒壊の危険があったため、諸表簿類の重要書類及び必要な備品類を搬出し、一時保管場所として体育館に搬入した。また、校舎周辺にロッカーや下駄箱等を設置し、立ち入り禁止の処置を行った。当夜は、管理職等数名の教職員が、校庭に本部テントを設置して警備に当たるとともに現場で待機した。

18:00 市内10校に避難所を開設、市職員を動員して対応。一時1万1千名を超える避難者を収容。

21:00 学校教育課から全校に対し、翌日以降の対応について、以下の3点を通知するため伝令を出す。

- 1) 幼児、児童生徒の安否確認
- 2) 教職員の所在確認
- 3) 安全が確保されるまでしばらくの間臨時休校の措置を取る

22:30 市内全校の被害状況の把握完了

・ **3月12日(土)**

0:30 避難所への対応のため、田尻学校給食センターで炊き出しを開始

1:00 市内小・中学校の被害状況の概要を北部教育事務所へ報告

6:30 担当職員が古川東中学校を訪問し、被害状況を確認

8:30 臨時教育委員会及び校長会代表者会議開催の連絡

- ◇ 教職員が小グループを編制し、徒歩や自転車で生徒宅への訪問による安否確認を開始した。積雪や厳しい寒さのため、本部(職員室)を屋外テントから運動部の部室棟内に移動する。

14:00 臨時教育委員会、校長会代表者会議を開催、被害状況の報告と今後の対応について協議する。

・ **3月13日(日)**

11:00 臨時市内園長会議・校長会議開催の通知文、市内全校臨時休業の通知文を配布

18:30 北部教育事務所へ大崎市小・中学校の被害被災状況と児童生徒の安否確認状況等を報告

- ◇ 生徒宅への家庭訪問による安否確認及び被災状況の確認。各関係機関との対応

・ **3月14日(月)**

各避難所、給食センターの炊き出し、給水所等の支援

・ **3月15日(火)**

10:00 臨時市内園長会議・校長会議を開催

市内幼・小・中学校の全教職員(非常勤講師を含む)の安否確認完了

仮設プレハブ校舎の発注

◇ 本部（職員室）を運動部の部室棟から体育館の器具庫へ移動する。

・ **3月16日（水）**

◇ 文部科学省による応急危険度判定調査

・ **3月17日（木）**

市内全幼児，児童生徒の所在確認完了

・ **3月21日（月） 春分の日**

◇ 北部教育事務所から，古川東中学校の今後の対応への助言や指導主事派遣により学校再開へ向けての支援をいただく。

・ **3月23日（水）**

◇ 隣接する市総合体育館2F研修室（アリーナは危険な状況のため，立ち入り禁止）を借用し，本部（職員室）を移動。年度末事務整理や進路事務，人事異動関係事務等の仕事が可能になった。

・ **3月25日（金）**

◇ 古川東中学校 PTA より大崎市長へ教育環境整備の要望書が提出される。

1) 学校再開に向けた情報の提供 2) プレハブ校舎建設の見通し 3) 学習環境の整備について

・ **3月28日（月）**

9：00 定例教育委員会開催 被害状況と学校再開に向けた対応について報告

・ **3月29日（火）**

10：00 大崎市議会全員協議会開催

・ **3月30日（水）**

◇ 1，2年生の修了式及び退職・転出教職員の離任式を市総合体育館の駐車場にて挙行する。



液状化で地盤沈下した職員玄関

3 古川東中学校の被害状況

校舎は，南側が885mm，北側が603mm沈下し，校庭側に大きく傾いた。校舎内外の壁面の至るところに亀裂・破損等が見られ，校舎及び校庭の一部が立ち入り禁止と判定された。また，教室内の机やロッカー等の備品も落下や転倒し，多くが破損した。校舎西側に隣接する体育館は，床面が壁面周辺で盛り上がったものの，備品搬入には支障がなく，短時間の集会が可能な状況であった。しかし，電気，上下水道ともにストップし，長時間に渡る使用や滞在は不可能であった。

体育館南側のプールは，本体が陥没によりねじれたように歪み，プール内の水が流出した。また，校舎周辺の至る所に液状化現象が見られた。このような甚大な被害にもかかわらず，大地震の際，

幸い生徒は下校しており、多くの教職員が校外指導中のため校地から離れていたため、奇跡的に人的被害は皆無であった。

Ⅱ 古川東中学校の授業再開について

1 分散授業までの経緯

古川東中学校の生徒・教職員約620名を一か所に収容し、教育活動ができる施設は市内の公所や小・中学校には無く、県立学校や私立高校等も含め受け入れ可能な施設は見つからなかった。様々なシミュレーションを試みたが、たどりついたのは、近隣の中学校へ学年ごと、分散する措置案であった。これを元に、古川東中学校各学年の学級数及び教職員の仮職員室、受け入れ校における転用可能教室との関係から、近隣の3つの中学校(古川西中[3学年・5クラス173名]、古川北中[2学年・6クラス・203名+特別支援1クラス・4名]、古川南中[1学年6クラス・173名+特別支援1クラス・6名])へ、学年ごとに分散し、授業を再開する案が最善と判断した。

◇ 分散授業に伴って懸念されたこととして、

- ① 古川東中学校としてアイデンティティが失われるのではないかと。分散がいつまで続くのか。
- ② 通学の問題。
- ③ 学校間におけるトラブル発生への心配。その予防策と問題が起きた時の対応策
- ④ 校則の違いをどうカバーするのか
- ⑤ 環境が大きく変わることによる不安への対応と、スクールカウンセラー配置の課題。
- ⑥ 校長や教頭など、学年に所属しない職員の勤務先について。
- ⑦ 時間割の編成と教職員の負担について。
- ⑧ 部活動実施への不安。
- ⑨ 学校給食への不安。
- ⑩ 学校行事等の実施についての不安。

などの課題が出された。

P T A本部役員会や保護者対象の説明会等を経て、仮設校舎が完成するまでの1学期間、生徒・教職員を13台のバスを借り上げて輸送し、対応することとなった。

2 分散授業開始までの経過

・ 3月30日(水)

◇ 受け入れ校等関係学校長会議

- ・ 市教委及び当該校の校長で、分散授業開始までの計画を協議した。

19:00 P T A総務役員会

- ・ 市教委より分散授業決定までの経緯及び実施計画を説明。質疑応答及び保護者説明会開催に向けての課題整理等の協議。

・ 4月3日(日)

15:00 P T A総務役員会

◇ 保護者説明会に向けて、再度課題等を協議。

・ 4月4日(月)

◇ 職員打合せ、運営委員会

- ・ P T A総務会の報告(分散授業の説明等)
- ・ 本校舎職員室片付け *引越準備開始

・ 4月5日(火)

◇ 大崎市議会総務常任委員による現地視察

15:00~ 大崎市議会総務常任委員会

・ **4月6日(水)**

◇ 分散受け入れ校との教職員打合せ

- ・ 一日の生活時程
- ・ 生徒指導体制
- ・ 給食は分散先の学校が提供
- ・ 昇降口、特別教室等の使用等
- ・ 学校給食（受け入れ校が提供）
- ・ 分散授業は1学期のみ（7月末に仮設校舎が完成する予定）
- ・ 通学方法は、古川東中に朝集合し、各校まで大型バスで送迎
- ・ 授業は、古川東中の教員が担当 等

19:00 古川東中学校保護者への説明会開催（古川第三小学校体育館）

・ **4月7日(木)**

- ・ 給食用物品を受け入れ校別に仕分け（市教委職員、受け入れ校給食担当者）

◇ 生徒登校日

- ・ 午前 新入生1日入学
- ・ 午後 2, 3年生 転入職員着任式, 教科書等配布
校舎, 体育館が使用できないため, 着任式は, 校庭で行った。

・ **4月9日(土)**

◇ 市教委職員による受け入れ校へ備品の搬入・職員、生徒用机・椅子等の搬入作業

・ **4月10日(日)**

◇ 搬出, 整理作業

- ・ 午前: PTAの協力による備品搬出作業
- ・ 午後: 受け入れ校に備品等を搬入

・ **4月11日(月)**

- ・ 分散校へ給食用物品の搬入作業（市教委職員）

◇ 受け入れ校等関係学校長会議

・ **4月12日(火)**

◇ 始業式（古川東中学校 体育館）



保護者・生徒・教職員での被災校舎からの搬出作業



堂々と抱負を述べた代表生徒

校舎から搬入した備品を前面に寄せ、体育館の狭いスペースに約400名の新2，3年生が肩を寄せ合って整列し、平成23年度の始業式を迎えた。

生徒たちの姿には、未曾有の大震災による辛い体験を、自分自身を磨き、古川東中生としての誇りを高める機会ととらえ、前向きに学校生活を送ろうとする決意にあふれていた。

下記は、2学年代表生徒の抱負である。

寒く辛い3月が過ぎ、ようやく春らしくなってきました。こうしてみんな集まって2年生を迎えられることをとても嬉しく思います。東日本大震災という日本史上最悪の災害で、東中の校舎は大きな被害を受けました。そして、いつもと違う環境での学校生活になります。このような状況の中で生活していくために、3つのことを頑張ろうと思います。

一つ目は、お世話になる中学校のみなさんへの感謝の気持ちを忘れずに生活するという事です。他校で学習し、生活するという事は、たくさんの人にお世話になるという事です。おそらく、お互いに不自由だと感じることもあるかもしれませんが。そのような時でも、思いやりをもって行動することを心がけていきたいです。

二つ目は、東中生としての誇りをもつという事です。校則や規則を守ることはもちろん、人への接し方など、人から教わるのではなく、手本になるようにしていきたいです。生活する場所が変わったとしても、今までの私たちがしてきたように挨拶やルールを守る姿勢を忘れずに過ごしていきたいです。

三つ目は、自分の考えをもち、進んで行動するという事です。今まで、部活動や委員会などは、先輩の指示を聞いてやってきました。今までも考えて行動することはありましたが、自分のことで精一杯でした。これからは、自分で考え行動し、部活動や委員会では後輩を引っ張り、学級や生徒会の力になりたいです。また、中学生として、被災地の方々のためにできることを考え、行動に移していきたいと思います。

先輩になるという自覚をもち、後輩や友達、そして誰かのためになることをしていきたいです。

・ 4月13日(水)

◇ 入学式

- ・ 学区内の私立大崎中央高等学校の体育館を借用し、入学式を挙行。
- ・ 大きな期待と希望を胸にした新入生190名が入学し、いよいよ古川東中がスタートした。

・ 4月14日(木)

◇ 対面式(古川東中学校体育館)



中学校生活に瞳を輝かせる1年生



1年間の学校行事を川柳で紹介する生徒

・ 4月18日(月)

◇ 分散授業スタート

生徒、教職員の送迎バス13台を総合体育館駐車場、合同庁舎駐車場、大型店舗駐車場に配車、三校での分散授業がスタートした。北部教育事務所から2名、栗原地域事務所から1名の指導主事の派遣をいただき、各分散校での生徒指導を中心とした支援をいただいた。

◇ 市教委から親と子の相談員 3 名，教員補助員 5 名を配置，県スクールカウンセラーを通常の 1 名に緊急派遣 2 名（一学期間）を加えて受け入れ校での支援に当たる。親と子の相談員には，養護教諭の経験者 2 名，教員補助員 1 名にも養護教諭経験者を当てて，子どもたちの心のケアに対応した。

- ・受け入れ先の 3 校の先生方や生徒たちには，様々な制限や制約で不自由な生活になるにもかかわらず，古川東中の生徒たちを温かく歓迎していただいた。受け入れ校の学校の生徒たち，学校間や部活動場所へのバスでの送迎など，授業再開に向けて多くの方々に支えられたことに感謝の気持ちでいっぱいになった。
- ・保護者や教職員の一番の願いは，たとえ授業のために分散しても，生徒に古川東中生としての誇りと一体感をもち続けさせることであった。
- ・古川北中生徒会が企画した歓迎式では，「ともに生活する仲間として歓迎します。」ということばと，教室に飾る鉢花や「東魂」の文字が刻まれたキーホルダーをプレゼントされた。

・ 5月9日（月）

◇ 東京都より現職教員の派遣

- ・東京都教育委員会より，古川東中学校に対して，主幹教諭 1 名（保健体育科），主任教諭 1 名（国語科），教諭 2 名（数学科，技術・家庭科）の計 4 名の教員を派遣いただいた。これにより教科のカリキュラム編成が容易になった。

3 分散授業での課題

授業再開に当たり，当初は，①学年内での教科指導担当教員の不足，②バス通学に対する負担軽減措置としての 5 校時限による時数不足という 2 つの大きな課題があった。

「古川東中の教科・生徒指導は，古川東中の教員が行う。」が原則。学年によっては教科の偏りがあったり，保健体育を除き技能教科担当が 1 名であったり，また，学級担任は，他の 2 校に指導に行くことができないなどの制限があった。そこで，不足教科についての加配申請を行った結果，①については，5 月に東京都より 4 名の教員派遣があり，1 年：保健体育，2 年：数学と国語，3 年：技術の授業が可能になった。

また②については，夏季休業日の短縮（4 日間減）と 2 学期以降の週時数を 30 時間と増やすことで，可能な限りの時数回復に努めることにした。その結果，2 学期末の段階で，昨年度と同様の時数確保ができた。



古川北中での 2 学年のあいさつ

しかし，分散授業に当たり，職員の出勤時刻 7：10，生徒登校（バス内集合）7：40，生徒帰校時刻は 15：30 頃，その後，市内各所に拡散した部活動の練習場所（県立古川高等学校体育館，私立古川学園体育館，市民会館，生涯学習施設等）への移動及び遅くまでの部活指導という日々が続いた。日を追うにつれて，「目に見える課題」よりも，教職員間の情報の共有不足，生徒指導体制を整えられないこと，教職員の疲労の蓄積等，「目に見えない課題」が浮かび上がった。とりわけ，生徒指導での足並みがそろわず，「これまで築き上げてきた規律ある態度やルールの遵守等が崩れつつ

ある」という大きな課題が明らかになった。

そこで、全学年が1つの仮設校舎で生活する2学期以降の生活を見据えて、週1回、7：10～7：30までの20分間、通学バスが発車する前の時間帯に学年主任者会を設定し、各学年の情報交換や課題の共有化を図り、教職員の危機管理意識の高揚と一体感の醸成に努めた。

4 校舎解体までの課題

校舎の解体に当たっては、各教科ごとの備品の仕分け作業等が必要になってきた。危険校舎に立ち入り、余震を気にしながらの作業は過酷を極めた。また、教科用備品の移動、廃棄物の分別作業は大変な労力を要する作業であった。校舎内から集められた大量の廃棄物の分別作業は、校長、教頭や事務職員など本部の職員室に残った少ない教職員と教育委員会職員とで進められた。

また、大規模な移動作業等の日程は、学校行事や中体連等の行事の合間を縫った休日に設定され、教職員の疲労の蓄積等を考慮すると容易なことではなかった。近隣校の業務員にも派遣を要請するなどしながら、校舎内を整理する作業に追われる日々であった。

Ⅲ 古川東中学校での生徒会活動

1 生徒会の取組

「東中の未来の扉を開いていくのは、私たち東中生です。先が見えない時があっても希望をもって互いに励まし合い、助け合えば、絶対、道は開かれると信じて頑張ろうという思いを込めました。(中略)支えてもらっていることに感謝すると同時に、ここにいる東中生一人一人が、常に、自分たちにできることを考え学校生活を送り、この困難を乗り越え、さらなる東中の発展を目指しましょう。」。

これは、生徒会総会でスローガン「希望～東中の未来の扉をひらく瞬間～」を発表した時の生徒会長のことばである。

この生徒総会で、「世界・日本・地域とつながる『東中つながりプロジェクト』という取組が



古川北中学校でのお別れ会 北中生徒による合唱 心一つに ～夢と希望と決意をもって～

全員の総意で決議された。大震災やその後の復旧・復興を通して改めて気付かされた生命の尊さや人とのつながりの大切さ、支えられて生きていることの有り難さを胸に刻み、「自分たちでできることを実践していこう」という熱い思いで企画・提案されたもので、具体的には、エコキャップ運動や施設訪問など、「人とのつながり」を意識して、自分たちの力で長く継続できる活動を、部活動や生徒会の各委員会で実践していく取組でつながった。

エコキャップ運動は、学級ごとに実践し、現在も継続中である。

また、美術部では、大崎地区内の施設に避難している南三陸町の方々に手作りうちわを贈り、その様子が「おおさき広報」に掲載された。三校分散が終了する1学期末には、生徒会執行部を中心に、多くの人に支えられて無事に1学期を過ごすことができた「感謝の気持ち」と、「東中の復興に向けた希望」を込めて折り鶴と短冊を作り、仙台七夕に参加した。



エコキャップ運動ポスター

さらに、2年生では、感謝の思いを短歌にし、受け入れ校へ記念に贈った。以下は、そのときに、生徒が詠んだ短歌の一部である。

- 朝早く 大変だけど ありがたい 勉強できる この環境が
- 北中で お世話になった 毎日が とても楽しく あたたかだった
- 北中で 勉強できる 喜びと感謝の気持ちで 溢れる心

昨年夏の高校野球甲子園大会の選手宣誓の中に「人は支え合い、協力し合うことで希望を見だし、未来へ進むことができる」ということばがあったが、生徒たちは、分散授業を通して学習する場所や部活動の場所を貸与してくださった方々、通学バスの運転手さん、励ましの手紙や折り鶴を送ってくれた関東・関西の中学校のみなさんへの感謝の気持ちを持ち、前を向いて歩いていく高い志と強い心が培われていることを確信した。

2 新たな一步を踏み出した2学期

5月中旬から工事が始まった仮設校舎の建設が順調に進み、当初の計画通りに、7月末に引き渡しが行われた。夏季休業中ではあったが、古川東中生としての一体感と新たな決意・希望をもたせたいと考え、各受け入れ校から仮設校舎の廊下に搬入していた生徒用椅子や机などを、生徒たちの手で教室内に運び入れ、教室環境を整えた。そして8月22日。夏季休業日を4日間短縮して、2学期の始業式を迎えた。

下記は、3学年代表と生徒会代表が述べた2学期の抱負である。

=====

3校分散の1学期が終わり、いよいよ仮設校舎での生活が始まります。僕たちは、今現在、3つの学年が同じ校舎で学習できる環境にあることに感謝し、また一人一人が3学年としての自覚を新たにもって2学期を過ごしていきたいと考えています。

震災後、「もしかして運動会など、いろいろな行事ができなくなるんじゃないか」「3年生として最後の1年なのに、そうなったらさびしい」などと、家族や友達と話していました。でも、授業も行事も普通にできるということを聞いてほっとしました。また、先の話ではありますが、もし高校に入って他校の中学生の友達と話をするようなことがあった時、「校舎は今はないけれど、行事とかが最高に良いものができたんだ。すごくたくさん良い思い出ができたんだ」と、自分たちががんばってきたことを誇れる取組ができたら



仮設校舎への搬入作業(7月下旬)

いいと思います。

また、充実感も味わうことができると思います。行事では、クラスが、学年が、そして全校生徒が一つになって素晴らしいものが創り上げられるよう、皆でがんばりましょう。

もう今年も3分の2が過ぎようとしています。時間が経つのが本当に早く感じられます。これから一日一日を大切に、充実した2学期を送るためにはどうすればよいのか、何事にも全力で取り組むことを通して見つけていきたいと思っています。

私たち3年生は、受験生として勉強にも一生懸命に取り組まなければなりません。きっとこれからいつも心のどこかで、「勉強しなくては」と思って生活を送ることになるでしょう。しかし、現実はこの2学期が終われば、入試はもうすぐです。高校や就職、自分が進路達成したときのことを思い描きながら、ひたすら勉強しましょう。

私たちには、行事やたくさんのかたちを一緒に乗り越える仲間がいます。辛いときは励まし合って、皆でがんばっていききたいと思っています。

=====

8月4日、大崎市内のすべての中学校の代表が集まって、「生徒会サミット」が行われました。東中からは、会長高村、副会長小川と高田が参加し、1学期に取り組んだ東中生の活動を紹介してきました。その際、ある中学校の代表者から、「校舎がないのに素晴らしい取り組みを実践していてすごいと思います。ぜひ参考にして、自分の学校の生徒会活動に取り入れたいです。今後も大変なことがあると思いますが、がんばってください」という言葉をいただきました。

3つの中学校での分散授業、毎朝のバス通学、小学校や高校、地域の施設を利用した部活動。あの地震さえなければ経験せずに済んだことです。しかし、大変な環境で過ごしたからこそ、温かく支えてくれた地域の中学校とのつながり、一つも中止することなく行った生徒会行事を通して、東中生の強いつながりを実感することができたのではないのでしょうか。

2学期は、東中三大行事があります。そして、東中つながりプロジェクトの充実化を図る時です。1学期、大崎市内の中学校の中で、かつてない困難を乗り越え、一番がんばったのは、私たち東中生であることを誇りに、希望をもって新しい東中の未来の扉を開いていきましょう。2学期も、ご協力よろしく願います。

=====

3校に分散していた古川東中生575名全員が一つ所に集い、自分たちを支えてくれた多くの方々への感謝の気持ちと、仲間とともに逆境を乗り越えられたことに自信と誇りをもって迎えた2学期、新たな東中の始まりであった。

2学期がスタートして1週間後、もうじき解体される校舎に看板を掲げ、「希望～一致団結見せましょう！東中の底力を～」のテーマのもとに行った運動会。赤、青、黄、緑、紫の5色に分かれての競技や応援合戦の対抗戦だったが、だれもが「ひとつの心」で活動し、やり遂げる喜びにあふれていた。一人の応援団長が、「あの日を境に僕たちは思い出の詰まった東中を離れ、ばらばらの学校生活を送ってきました。そんな僕たちが、やっと、今日この場所で、同じ時を刻みます。仲間同士が支え合い、ともに頑張っていく平和な東中をめざしていききたいと思っています。」と述べ、古川東中生全員の思いを伝え、新たな一歩を刻んだ感動の一日となった。

3 現状と課題

全校生徒573名、19学級の学校規模に対して、仮設校舎には、特別教室が各1室、集会等ができる多目的スペースはない。中でも、3～4学級の理科が同時程表に組まれている日もあり、実験・観察が十分にできない状況にある。そのため、理科担当教員は、教室でできる観察・実験の教材開発に苦心している。

また、本校体育館も間もなく解体の予定である。さらには、これまで体育の授業や部活動、学校行事等で優先的に貸与していただいていた市総合体育館も、震災復旧による工事が始まり、8月末

までは使用不可である。その他に、プレハブ規格の仮設校舎の教室や廊下などの空間には余裕がなく、それに伴う生徒へのストレスの蓄積が心配されること、集会活動の場所や部活動等の活動場所の不足など、ハード面、ソフト面における課題も山積している。

しかし、学習できる場所があること、正常な教育活動に向けての各関係機関の多大な支援により環境整備が整いつつあることに感謝し、教職員全員で知恵を出し合い、生徒のために何ができるかを問い続けながら、一つ一つ解決を図っていきたいと考えている。

4 終わりに

「復興」を果たすには、生徒が一か所で過ごせる「校舎」という器は欠かせない。しかし、何よりも、生徒の思いを一つにし、その学校の生徒であることに誇りをもたせることが必要不可欠と考えている。

下記の「つながり」という詩は、全校生徒が取り組んだ夏季休業中の課題の5行詩の中から選んだ7つの詩を、東京都から派遣いただいた国語科の先生が一つの詩として繋ぎ合わせ、新たに「つながり」という題を付けた詩である。

新たな一步を刻んだ運動会から始まった2学期。一つ校舎に集い、十分な学習環境とは言えない状況の中で、生命の尊さや人との絆の大切さ、有り難さを忘れず、古川東中の新たな未来の扉を開こうと前向きに学校生活を送る生徒たちとともに、今ようやく、正常な教育活動に向けての一步、新たな歴史を刻み始めたところである。

つながり

あの日 君が言った
手をにぎり
「大丈夫」だと
不安だった気持ちに
勇気がわいてくる

私たちは一瞬で校舎を失った
もう入れない学舎の前に
不安の多い毎日だったけど
たくさんの人に支えられ
過ごした三ヶ月を忘れない

今の日常 勉強できる環境
それは たくさんの方々のおかげ
私たちがいつも支えてくださった先生方
校舎を貸してくれた学校の方々
支援してくださった皆様に心から感謝

私たちは地震の怖さを忘れない
私たちは津波の怖さを忘れない
私たちは感謝の気持ちを忘れない
そして私たちは笑顔を忘れない
私たちはそう決めたから

失ったものは大きい
でも得たものもある
それは多くの人との「つながり」
支援とともに伝わる「気持ち」
それが何より「ありがとう」

ありがとう
顔も名前も知らないけど
心の中でつぶやいた
私の胸は光っている
光りを与えてありがとう

復興への力をありがとう
明日への力をありがとう
未来への希望をありがとう
あなたの心をありがとう
感謝とともに歩き出す



古川東中学校・鉄筋校舎の解体工事(平成23年10月)